

## AA 研共同利用・共同研究課題

### 「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

#### 平成 24 年度第 3 回研究会(通算第 6 回目)

日時: 平成 25 年 3 月 11 日(月) 午後 1 時～午後 6 時, 3 月 12 日(火) 午前 10 時～午後 4 時

場所: AA 研 301 セミナー室

### ■研究会プログラム

#### 1 日目

【報告 1】 北村由美 (AA 研共同研究員, 京都大学)

「移動する華人のライフ・ヒストリーから見えてくる課題」

【報告 2】 黄蘊 (AA 研共同研究員, 京都大学)

「マレーシアにおける上座仏教の展開と華人信者の実践」

#### 総合討論

#### 2 日目

【報告 3】 玉置充子 (AA 研共同研究員, 拓殖大学)

「宗教儀礼と「華人性」—タイのある華人廟の「創出」」

【報告 4】 伏木香織 (AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー)

「シンガポール旧暦 7 月のスペクタクル化する儀礼」

平成 24 年度第 3 回研究会(通算第 6 回目)として、4 名の共同研究員が過年度報告した内容をブラッシュアップして再報告を行った。なお、当初はもう 1 名の共同研究員の報告を予定していたが、病欠した。

第 1 報告では北村が、20 世紀半ばにインドネシアからオランダに移り住んだ華人のライフ・ヒストリーをタイプ分けして紹介した上で、移動する華人の「華人性」について語ることは是非について、問題を提起した(⇒「報告 1」の要旨を参照)。

第 2 報告では黄が、マレーシアにおいて主に英語教育を受けた華人たちの間で広がりつつある上座仏教の信仰実践について取り上げ、彼らが「異文化」としての上座仏教をいかに自らの宗教観と接合させようとしているかを論じた(⇒「報告 2」の要旨を参照)。

第 3 報告の玉置は、タイの新興華人廟における観察・インタビューに基づき、「タイにおける「華人らしさ」としか呼び得ない儀礼のあり方を明らかにした(⇒「報告 3」の要旨を参照)。

第 4 報告の伏木は、シンガポールにおける旧暦 7 月に現出される儀礼空間とその表象を詳細に紹介した。Hungry Ghost Festival として知られ、独特のイメージを持ちつつスペクタクル化している旧暦 7 月の一連の儀礼は、一見一枚岩の「中国(華人)的」な文化を想起させるが、しかし実際は、多様な主催者が「自分たちのやり方」や「正しい伝統」といった時に相反する価値をせめぎ合わせ、またそれを多数の無関心者が眺め適宜参加しているという実態を明らかにした(⇒「報告 4」の要旨を参照)

年度末や病欠が重なり、参加者は当初予定していたよりも少なくなったため、最大人数が出席する初日の最後に総合討論の時間を設けた。今回はいずれも過年度中に既発表の内容をブラッシュアップさせたものであるため、事実関係などについては非常に精度が高いものとなった。しかし、「華人」や「華人性」に類した概念を客観的事実として認定・分析することを目的するのではなく、ある事象を通して人々が何を行い、何を語り、何を想起し、その結果いかなる「華人」や「華人性」が文脈ごとに立ち現れるかを「微分的に」明らかにすべきことを、本共同研究会の方向性として再度確認した。総合討論を踏まえ、研究会終了後には代表者から、この共同研究会の方法論についての解題をメールにて詳述し、今回の欠席者とも共有をした。

各報告の要旨と主な議論内容については、以下を参照されたい。

(文責: 津田)

---

## ■「報告 1」の要旨

### 「移動する華人のライフ・ヒストリーから見えてくる課題」

北村由美 (AA 研共同研究員, 京都大学)

本報告は、平成 24 年度第 1 回の本研究会で発表した「西への道—在オランダ インドネシア 華人のライフ・ヒストリー」の内容をさらに整理する形で行った。まず、第二次世界大戦後のインドネシア華人の国際移動の概要を説明した後、オランダ在住のインドネシア華人の歴史的背景や先行研究における描かれ方をまとめ、その上で、6 人のライフ・ヒストリーの詳細を、個々人の移動の理由から分析した。そして最後に、本研究会の中心的概念である「華人性」をめぐって、インドネシア在住の華人との比較を念頭に、何点かの考察を述べた。

発表後の質疑応答において、はじめに本研究会の代表者から研究会の趣旨に照らし合わせた上で、事実に基づく分類型の分析ではなく、ライフ・ヒストリーの主体による「語り」と「記憶」の解釈に焦点をあてて、再検討を行うよう助言があった。その後、他の参加者からの意見なども参考に、本事例の場合は、インフォーマントが語る出身地インドネシアにおける生活の記憶や、家族に関する

語りなどに個々のインフォーマントが意図せざる共通点があることに気がついた。今後は、行為中心の視点からライフ・ストーリーのデータを再度見直し、「語り」と「記憶」により忠実な分析を行った上で、論述を開始する予定である。

(文責: 北村)

---

## ■「報告 2」の要旨

### 「マレーシアにおける上座仏教の展開と華人信者の実践」

黄蘊 (AA 研共同研究員, 京都大学)

東南アジア地域の中でマレーシアは伝統的な上座仏教信仰の地域とはいえないが、植民地時代よりタイ、ミャンマー、スリランカの僧侶の渡来に伴い、上座仏教の教えとその実践システムが持ち込まれてきた。以来、マレーシアではタイ系、ミャンマー系、スリランカ系という三つの系統の上座仏教寺院とそれぞれの僧侶による宗教活動が続けられ、多元的な「上座仏教世界」が形成されてきた。なお、華人住民は上座仏教の主要な信者層で、とくに英語教育出身の華人が中心的な存在となっている。

1980年代末以後、マレーシアではローカルなマレーシア人僧侶と信者の協力により、新たに設立された上座仏教センター、協会が抬頭し、マレーシアの上座仏教展開の新しい現象となっている。これらの上座仏教センター、協会は、瞑想や仏教知識の研鑽を主な活動内容としている。近年その数はさらに増加し、注目を集めている。

このような重層的な環境の中におかれ、マレーシアの上座仏教僧侶と信者たちはローカル社会の状況に合わせ、多様な宗教実践形態を構築してきている。その中で独自の宗教観の形成もみられる。上座仏教の実践に対しては、とくに華人上座仏教僧侶と信者たちは、それぞれの社会・生活体験に基づき、独自の実践、観念体系を築いてきている。

本報告は以上のような状況を踏まえ、華人上座仏教信者たちの多様な実践形態、また人々の実践、ディスコースにみる上座仏教にまつわる功德観と積徳行の諸相について考察してみた。それらを通して、華人信者は、上座仏教という「異文化」にどう向かい、いかなる理解をもつのか、また、華人上座仏教徒からみる「華人」とは何かといった問題について検討を試みた。

報告を受けた質疑応答を通して、今後より信者たちの実践のダイナミズムに注目し考察していくことを確認した。そのような考察を通して、マレーシアの英語系華人の生活、意識の諸相を紡ぎあげ、本研究会の主題である「多元的想像・動態的現実としての「華人」」の諸相に関して具体的に検討を行っていききたい。

(文責: 黄)

---

## ■「報告 3」の要旨

### 「宗教儀礼と「華人性」—タイのある華人廟の「創出」」

玉置充子（AA 研共同研究員，拓殖大学）

ホスト社会への同化が進んでいるとされるタイ華人に関する先行研究では、「華人性 Chineseness」が「タイ人性 Thainess」との対比において論じられる傾向がある。例えば、①Thainess は文化的側面を強調するもので、「言語(タイ語)、慣習、宗教(上座仏教)、国王への敬意」に適応しさえれば、華人も Thai になれる、②華人は「うわべ」の Thainess を維持し、国民として期待されるタイらしい行動と華人らしい実践を結びつけることが許される、③華人にとってタイへの同化はもはや二者択一的なジレンマではなくなったが、その代わりに、文脈、戦略として「いつ、いかに、なぜ」華人性が喚起されるのかという問いが生まれている、といったことが指摘されている。

本報告では、こうした Thainess/Chineseness の議論を念頭に置いた上で、タイ中部ナコンパトム県の「紫竹林宮」という華人廟を事例に、「タイ化した華人」が新たに廟を立ち上げ発展させる過程において、彼らが何を「華人らしい」とイメージして選択し、表象・実践しているのかを考察した。

紫竹林宮は、バンコク在住のアマ(阿媽)と呼ばれる華人系の女性霊媒とその信者たちによって、ナコンパトム県都郊外に 2001 年に創建された新しい華人廟で、観音や玄天上帝等とともにタイ最南部のパッタニー発祥の女神「林姑娘」を祀る。アマは、50 代前半で、30 代後半(1990 年代後半)に観音と瑤池金母が憑依し、霊媒として活動するようになった。林姑娘、ヒンドゥー教の女神も憑依するが、憑依中もトランス状態にはならず常態を保っている。アマや信者の間では、タイ人/華人という意識が希薄で、潮州語など方言も含めて中国語が話せる人はほとんどいない。マネージャー的立場にあるアマの夫は、李姓の潮州系華人で、かつて陶器工場を経営していた。主要な信者の 1 人の P さん一家は、バンコクの高学歴エリート一家である。P さんは、有名大学の中国語学科を出た 20 代女性で、中国語も多少話せるが、初対面の時には華人であることを否定した。このほか、廟には 10 人程度の信者が常時寝泊りしている。信者には若い女性や家族ぐるみで参加している人も多い。

年中行事は、春節、観音誕(旧暦 2 月、6 月、9 月)、ソングラーン(タイ正月)、盂蘭盆、九皇勝会(旧暦 9 月 1~9 日)の 7 回実施される。本報告では、春節、盂蘭盆、九皇勝会の儀礼について、写真を交えて紹介した。九皇勝会は、タイやマレー半島に特有の華人の祭りで、北斗信仰に由来する福建起源の儀礼だと言われている。タイでは近年、菜食・禁欲を実践するベジタリアンのイベントとして、華人に限らず都市部の中間層を中心に広く受け入れられている。こうした流行を受けて、紫竹林宮にもバンコクから大型観光バスが何台も来ていた。

紫竹林宮では、九皇勝会の期間中にアマに憑依するヒンドゥーの女神に捧げる儀礼も

行われる。これは、バンコクのヒンドゥー寺院でも行われている「ナヴァラートリー(九夜祭)」に類するものだと考えられる。本堂での「華人らしい」儀礼が誰でも参加できる開かれたものであるのに対し、ヒンドゥーの儀礼はアマの信者だけが参加する閉じられたものであった。

アマを中心とする信者集団が、土地を入手して廟を立ち上げ発展させる過程でイメージしてきたのは、中国や中華世界ではなく、あくまで、タイにおける「華人らしさ」である。それは、タイの華人廟が実践している儀礼を通して表象される。アマたちは、それらを自分たちなりに取捨選択して効果的に組み立てることによって、想像され切り張りされた華人性を動員していると考えられる。

以上の報告に対し、質疑では、冒頭に触れた **Thainess** の概念をまず疑うべきではないかとの疑問が呈された。つまり、「タイへの同化」「中国の伝統からの逸脱」という視点を取らずに、**Thainess/Chineseness** というオーソドックスな語りに対するアンチテーゼとして、具体的な文脈において、当事者が何を正しいと考え何を信じているのか、アマや信者たち個人の語りを丹念に拾っていく必要性が指摘された。

(文責: 玉置)

---

#### ■「報告 4」の要旨

##### 「シンガポール旧暦 7 月のスペクタクル化する儀礼」

伏木香織 (AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー)

本発表は、シンガポールで近年注目される「旧暦 7 月」とその時期に行われるスペクタクル化する儀礼をめぐる、その記憶やイメージの共有がどのようになされているのかを起点とし、儀礼や儀礼主体となる組織、寺廟、それをとりまく信仰などの分析を通して、語られない「華人」とたちあられる「華人性」をもった時空間について考察する試みである。

**Hungry Ghost Festival** という英語名称が広まる中、なんとなく「華人のもの」とされる儀礼や芸能が街中に展開する旧暦の 7 月は、近年ではシンガポールの文化としても宣伝され、2011 年には **BBC** や **National Geographic Channel** などの取材陣が訪れ、広く放送された。しかし、実際に儀礼や芸能を行っている主体は、個々の中元会、個人なのであり、政府の補助があるわけではない。こうしたある種プライベートな出来事が、なぜ拡大、スペクタクル化することになるのか。

儀礼や組織の拡大、連携の発想の根底には、**Kampong** がベースとなった寺廟コミュニティとその変遷があると思われる。移民ごとに形成されたとされる **Kampong** は、その記憶をめぐる対話が絶えずすれ違い、人々が共有するとされる記憶も、時期も、方言話者というグループの構成も、それぞれさまざまであるのが実情である。その **Kampong** の中に成立した寺廟コミュニティは、**Kampong** に暮らした人々同様、その組織は当初からシンクレティ

ックなコミュニティだったのであり、そこからさまざまな背景をもつ寺廟や神壇などが習合していった。この柔軟でゆるやかな習合こそ、現在につながる緩いまとまりを作り出していると考えられる。

実際に中元超度の儀礼を観察してみると、その儀礼を行う人々、儀礼次第の細かな差異、儀礼の「学びかた」などに、毎年、大きな変化がみられ、決して儀礼を形通りに引き継ぎ、拡大しているのでもなく、創造しているのでもないことが見えてくる。またその場に参加している人々に目を向ければ、なんとなく「華人の」ものであるように見受けられる儀礼とその団体でありながら、一部「華人」とは宗教の違い、学歴の違い、それに伴う偏見と意見の齟齬などから、袂を分かち、慣習や儀礼に非連続、世代間断絶が生じている。また一方では、他のエスニシティの人々も参加し、必ずしも参加者が「華人」に限定されているわけでもない。寺廟集団のみならず、中元会の主体となる **Clan Association**、職業組合なども、それぞれの緩やかな連携が進み、参加者の外縁のはっきりしない集団となっている。同時に、中元節という儀礼を支える世界観をもたらす宗教を見れば、そこには多面的シンクレティズムが展開し、神明も儀礼行為もそれぞれが拡大しているのである。

実際に、旧暦7月の儀礼は、素朴な意味で「華人性」をもった、としかいいようがない時空間として、シンガポールの街中に出現する。その儀礼と伝説は文化として宣伝され、他のエスニシティ、あるいは国籍の人の目を通しては一枚岩の「華人」の実践であるように見えるかもしれない。しかしながら、実際には一枚岩の「華人」が行っているわけではない。「華人」を語らない「華人」風景を作り出す人々は、そのルーツや正統性を求めて中国や台湾とも積極的にかかわるが、そのなかで、互いの実践の多様性と柔軟性に、多いに驚き、マレー語で **Sakit hati** するのである。儀礼の中心には親密性をもった集団がありそうでありながら、その外縁は開かれている。こうした外縁のはっきりしない集団としての「華人」時空間が、旧暦7月のシンガポールの儀礼なのである。実態として外縁のはっきりしない集団としての「華人」はあれども、そこで行われているのはまぼろしの「華人性」探しではないのである。

(文責: 伏木)